2026.10.15　令和８年度北海道学校体育研究連盟研究担当者会議

旭川支部活動報告

小学校部会研究部長　旭川市立東栄小学校　　森　優也
中学校部会研究部長　旭川市立東明中学校　　杉浦　広憲

１　旭川支部の研究

令和６年度からの「自ら求め，豊かにかかわる体育活動～自律的で深い学びを支える教師の役割～」をから新たに「どの子も、自ら求め、豊かに関わる体育活動～自律的で**対話・協働を通した**深い学びを支える教師の役割～」を今年度の支部の研究主題とした。また、「単元デザインの工夫」と「関わりの工夫」という２つの研究の視点に、今年度は「好奇心」と「余白」を重視している。

「好奇心」を設定した理由は、新学習指導要領におけるキーワードの１つであり、「やってみたい」などこれまでの体育研究で大切にされてきた概念を包括するものだと考えたからである。

「余白」を設定した理由は、我々教員も余白が大切と新学習指導要領に向けての議論で述べられていること、子どもが主体的に学ぶならば、こちらが意図的に設定した余白が不可欠だと考えたからである。

これまでの体育研究を土台として、「好奇心×余白」を重要な視点として、R11 の旭川の全道大会に向けて研究を進めている。

旭川支部　研究主題

「どの子も，自ら求め，豊かにかかわる体育活動～自律的で対話・協働を通した深い学びを支える教師の役割～」

【研究仮説】

自律的な学びには、明確なゴールと見通し、意図的な交流の場、そして子どもが試行錯誤する余白が大切だと考える。体育授業で自律的な学びを生み出すために、単元デザインと共生・関わりの工夫を研究する。運動（学習内容）への深い理解から導き出される明確な目標と評価計画、**やってみたくなる遊び心を中心として、**個に応じた課題探究を促す環境設定を組み込んだ単元デザインにより、子どもは自ら学び取ろうとするだろう。また、「する・みる・支える・知る」の多様な関わり、子供同士の関わり、教師と子どもの関わりを工夫することで、**協働的な学びが進み、**深い学びを得られると考える。

研究の視点１～単元デザインの工夫	研究の視点２～関わりの工夫
・学習内容・目標・課題・評価の明確化 ・個に応じた課題探究を促す環境設定 ※「好奇心」をキーとする	・「する・みる・支える・知る」の関わり ※共生につながる視点として ・子供同士の関わり ・教師と子供との関わり

２　令和８年度研究授業単元と見どころ

神居東小学校　３年生　垣副　美紅先生

「フラッグフットボールを基にしたゲーム」

ルールと作戦のカード化が授業の核である。ルールは、「ボーナスゾーン」「ボーナスゲート」など、得点が増えるものにする。このゾーンやゲートを意図的に端に設置することで、守備者が片方に寄る状況を意図的に創り出せる。すると、「おとり」や「空いているスペースに走り込む」などの作戦がより適用しやすくなる。どちらもカードにすることで、まるでカードゲームを楽しむように作戦を話し合えるのではないかと考えた。

春光台中学校　３年生　工藤　颯太先生

E 球技・ゴール型「バスケットボール」

本単元では「得点につながるゴール前の縦パス・縦の動きをねらうプレイ（VIVANT として扱う）」をテーマにした。単元前半は攻撃に関する基礎的知識・技能の定着を図り、後半は前半の学びを活かしてチーム毎に練習を選択したり作戦を立案したりする場面を設けている。また「ヘッドコーチ」という役割を設定し、プレイを「みる」ことやアドバイスで個人やチームを「支える」活動を入れ、様々な形での活躍を価値付けていく。